

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

民謡を取り入れた音楽による表現：Ernö  
Dohnányiの民謡に対する姿勢に基づく考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 啓資 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1357">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1357</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 民謡を取り入れた音楽による表現

## —Ernő Dohnányi の民謡に対する姿勢に基づく考察—

鈴木 啓資 (ピアノ)

キーワード：ドホナーニ ハンガリー 民俗音楽 民謡 表現

### 1. はじめに

ハンガリーにおける民俗音楽研究というと、ベーラ・バルトーク Béla Bartók (1881-1945) とゾルターン・コダーイ Zoltán Kodály (1882-1967) が思い浮かぶのではないだろうか。彼らは民俗音楽研究の成果を自身の楽曲にも活かしており、それによって独自の書法を確立した。まさにハンガリーの民俗音楽をクラシックに取り入れた代表的な2人であると言えるであろう。

同世代に活躍したハンガリーの音楽家に目を向けると、前述した2人とは異なる路線で活躍していた音楽家として、エルネー・ドホナーニ Ernő Dohnányi (1877-1960) を挙げることができる。作品を発表する際に名乗っていたエルンスト・フォン・ドホナーニ Ernst von Dohnányi としても知られるドホナーニは、ハンガリーの作曲家・ピアニスト・指揮者・教育者である。ハンガリー人としてはフランツ・リスト Franz Liszt (1811-86) の次の世代で多方面に才能を発揮した音楽家の1人であり、20世紀のハンガリー音楽文化の主要な開拓者の1人とみなされている。

本稿ではドホナーニと民謡の関連性について考察をし、彼の楽曲のうち民謡が用いられたものに注目することとした。ドホナーニがどのように民謡を取り入れたのか、またそれによってどのようなことを表現しようとしたのか検討を行い、ドホナーニの民謡に対する姿勢を明らかにしていくこととする。

### 2. ハンガリーにおける民俗音楽研究

ドホナーニの民謡に対する姿勢を考察する前に、それまでのハンガリーにおける民俗音楽研究についてまとめる。

## 2-1. ハンガリーにおける民俗音楽収集の始まり

バーリント・シャーロシによると、ハンガリーにおいて民俗音楽の収集が始められたのは1782年のことであり、この年の新聞『マジャール・ヒルモンドー Magyar Hírmondó』誌上において、ミクローシュ・レーヴァイ Miklós Révai (1750-1807) によって古い歌を収集・投稿するように呼びかけられたとされている。しかし、この時代の収集では実地調査は行われず、身近な人々が歌っている歌を書きとめたり、地方に住んでいる知人に歌を書き送るよう頼んだりしていた程度であった (バーリント 1994: 12-13)。

19世紀になっても同様の状況であり、実際に現地に赴き、民俗音楽に触れて収集するということはほとんどなかったのである。そのような中で、蝸管式蓄音機 (フォノグラフ) が発明され<sup>1</sup>、民俗音楽研究に大きな影響を与えた。

## 2-2. 蓄音機を使った本格的な民俗音楽収集と研究

ハンガリーにおいて本格的に民謡を収集した初期の人物として、民俗学者のベーラ・ヴィカール Béla Vikár (1859-1945) が挙げられる。彼は発明されたばかりの蓄音機を使い、民謡や民話の収集を行った。しかし、ヴィカールは音楽家ではなく言語学者であったため、興味の対象は言葉であり、民謡においては歌詞に着眼していた (横井 2006: 117)。

ヴィカールの後を追って民俗音楽研究の道を歩んだのが、ベーラ・バルトク Béla Bartók (1881-1945) とゾルターン・コダーイ Zoltán Kodály (1882-1967) である。両者は1905年に親交を結び、その翌年から本格的に民俗音楽の収集を行った。この年にはコダーイは民謡を取り扱った博士論文『ハンガリー民謡における韻律法の節構造 A Magyar Népdal Strófászerkezete』を完成させているため、民俗音楽研究という点からみると、コダーイはバルトクに先んじて研究を行っていたということがわかる。両者はヴィカール同様、蓄音機を背負って各地に赴いたが、バルトクは1918年に収集活動を終えてしまった。それに対し、コダーイは第一次世界大戦後も収集を行い、その収集活動の期間に差が見られる。また、収集活動の対象も異なっており、バルトクがハンガリー人のみでなく、当時のハンガリー領に住むスロヴァキア人やルーマニア人などの民族的系統の異なる人々も対象としていたのに対し、コダーイはハンガリー人のみを対象としていた (横井 2006: 112)。

---

<sup>1</sup> トーマス・エディソン Thomas Edison (1847-1931) によって1877年に発明された。

彼らは研究業績として『ハンガリー民謡大観 A Magyar Népzene Tára』や『ハンガリーの民俗音楽 A Magyar Népzene』などを残しており、彼らの研究はハンガリーにおける民俗音楽研究の基礎となった。

### 3. エルネー・ドホナーニについて

1877年にオーストリア＝ハンガリー帝国のポジョニ（現スロヴァキア）に生まれたドホナーニは、1894年にハンガリー王立音楽院（現ハンガリー国立リスト・フェレンツ音楽大学）に入学した。1895年にはピアノ五重奏曲第1番 Op.1を作曲し、J.ブラームスに称賛され、演奏の機会をブラームス本人から与えられている。1898年、指揮者のH.リヒターの誘いでロンドンへ赴き、同地で演奏したベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番が世界的名声を得るきっかけとなった。また、1899年には、自身のピアノ協奏曲第1番によりベーゼンドルファー賞を受賞。1900年頃までには、ハンガリーの最も偉大なピアニスト・作曲家の1人として、ヨーロッパやアメリカで名声を確立したのである。1905年よりベルリン音楽高等学校で教鞭をとり、その後ハンガリー王立音楽院では院長まで務めるなど、演奏活動の傍ら、精力的な教育活動を行った。指揮者としては1919年にブダペスト・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者に就任し、バルトークやコダーイなどのハンガリー人作曲家の作品の普及に尽力した。政治的な事情により1949年9月にフロリダのタラハシーに居を構え、その後も演奏や録音、作曲、指揮、指導を精力的に続け、ニューヨークで録音を行っている途中で死去したのである。

ドホナーニの音楽は、ドイツロマン派の音楽とハンガリーらしさを折衷した作風であるとされている。また、バルトークやコダーイの行ったような民俗音楽研究家という側面はなく、民謡収集をはじめとする研究活動は行っていない。

### 4. 実際の楽曲と取り入れられた民謡の比較・分析

この章では民謡を取り入れたとされるドホナーニの楽曲を取り扱う。また、取り入れられた民謡の原曲を解明し、実際のドホナーニの楽曲と比較することにより、ドホナーニがどのように民謡を扱い、楽曲に取り入れたのかを検討する。

ドホナーニの楽曲に民謡を用いたとされる曲は複数存在するが、今回は《パストラレ（ハンガリーのクリスマスの歌〈天上より天使が降りてくる〉による）》（以下、パストラレ）と《ハンガリー牧歌 Op.32a》を取り扱うこととした。楽曲に取り入れられた

民謡の原曲を探すための手段として『ハンガリー民謡大観』ならびに『ハンガリーの民俗音楽』を用いている。曲中のどの旋律が民謡を取り入れた部分であるかという点が問題となり得るが、ドホナーニは1曲の中に同じような旋律を何度も登場させたり、明確に主旋律と伴奏形を書き分けたりしている。したがって、民謡を取り入れた可能性がある旋律はわかりやすくなっており、その点は大きな問題にはならないと考えた。

#### 4-1. 《パストラレ》

1920年に作曲され、同年12月27日にブダペストにてドホナーニ本人によって初演されたこの楽曲は、ハンガリーの有名なクリスマスの歌を取り入れている。このクリスマスの歌《天上より天使が降りてくる Mennyből az angyal》は、ヴィカールによって1910年に収集（録音）され、バルトークによって書き起こされたもの<sup>2</sup>である。『ハンガリー民謡大観』において、ヴィカールによって収集された旋律と類似する旋律は7種類存在しており<sup>3</sup>、独立した1つの民謡としてのみならず、降誕劇の一部として扱っているものも存在した。また、旋律だけでなく、歌詞の類似性も認められるものが多い。これらのことから、この民謡が様々な地域で歌われていたと言ってよいであろう。

ここで、バルトークが書き起こした民謡（譜例1）と実際に民謡の旋律が用いられている部分（譜例2）を比較する。なお、譜例2において、丸で囲った部分が原曲の旋律を取り入れた部分となる。

譜例1 『ハンガリー民謡大観』第2巻 p.584 より



1. M - mennyből az an-gyal lē-jött hozzá - tok, pász-to-rök,  
hogy Bēt-le-hem-ben si-et-ve mēn -vén, lás-sá - tok.

<sup>2</sup> 『ハンガリー民謡大観』第2巻396番(p.584)。

<sup>3</sup> 『ハンガリー民謡大観』第2巻の358-II(p.437)、365-II(p.479)、395(p.583)、397~400(p.585~586)の曲番号を付されたものが該当する。

譜例 2 《パストラール》 27～36 小節

バルトークにより書き起こされた原曲の譜面は、ヴィカールの録音に対して非常に忠実に書き起こされているため、拍子記号もなく複雑な譜面となってしまっている。しかし、2つの譜例を比較すれば、民謡の旋律がほとんど原曲のまま《パストラール》の曲中に用いられていることは明白であろう。したがって、この楽曲において、ドホナーニは民謡をそのまま活かして楽曲に取り入れているとすることができる。

4-2. 《ハンガリー牧歌 Op.32a》

次に、《ハンガリー牧歌 Op.32a》についても同様の考察を行う。この楽曲は1923～24年にかけて作曲され、1924年にハンガリーの Pécs においてドホナーニ自身によって初演された。性格の異なる全7曲から構成されており、組曲の形式となっている。本研究にあたり、7曲すべてを対象として進めたが、前述した2つの文献から原曲の民謡を見つけられたのは、第1番と第5番のみであった。

第1番において原曲となった民謡の旋律（譜例3）は、1903年にヴィカールによって、当時の Kénos において収集されている。ドホナーニが作曲した実際の楽曲の冒頭（譜例4）と比較すると、民謡の旋律をそのまま取り入れていることは明らかである。曲中では民謡の旋律が多少の変化を伴いながら9回繰り返され、それに様々な音が組み合わせられて曲が進んでいく。和声進行はまさにロマン派を感じさせるものであり、常に

変化に富んだものであるが、元の民謡は明確に認識できるため、民謡の旋律をそのまま活かしていると言ってよい。

譜例3 『ハンガリーの民俗音楽』 p.114 より



譜例4 《ハンガリー牧歌 Op.32a》第1曲 1～4小節

譜例中の丸で示した部分が民謡の旋律を取り入れた部分となっている。



第5番も第1番と同様に、民謡の旋律をほとんどそのまま活かしていると言える。この曲で使われた民謡（譜例5）は、1914年にコダーイによって、当時の *Istensegíts* において収集された。第1番で用いられた民謡と比較するとかなり長い民謡であるが、ドホナーニは原曲をかなり忠実に用いながら作曲をしていることがわかる（譜例6）。繰り返しの追加やリズムの変更など、民謡とのわずかな差異はありながらも大部分が一致しており、原曲をそのまま活かしているということは楽譜を比較すれば明瞭である。

譜例 5 『ハンガリー民謡大観』 第 1 巻 p.88～89 より

Kis ka-csa für-dön fe-ke-te tó-ba,  
any-já-hoz ké-szül Len-gyen-or-szág-ba.

Le-ve-li-be kis menyecs-ke, ő-lelj, a-kít sze-retsz.

Ezt sze-re-tém, ezt ked-ve-iém,  
ez az én é-dés ked-ve-sém.

Hopp i-de, dom-bos, csak a vén bocs-ko-ros.  
hopp to-va, mocs-kos,

A Ci-li-nek ud-va-rán, ud-va-rán  
mín-dén-fé-le do-bo-gán, do-bo-gán.  
An-nak ad-juk a lő-ánt, a lő-ánt,  
ki fél-kő-ti a ga-gyát, a ga-gyát.

Én fél-kő-töm kar-do-mat, kar-do-mat,  
add né-kém a lá-nyo-dat, lá-nyo-dat.

Lányok ül-nek a to-ronyba a-rany-ko-szo-rú-ba,  
o-da-jár-nak a le-gényék sár-ga sar-kan-tyú-ba.

Ha jó lányok vő-ná-tok, nekünk köszön-né-ték,  
sár-ga selyem szoknyá-to-kat föl sem e-mel-né-ték.

Cid-rom, bod-rom, sár-ga bo-do-rom, -rom.

譜例 6 《ハンガリー牧歌 Op.32a》 第 5 曲 1 ページ目より

Allegro grazioso

poco rit. a tempo

*p*

*più p* *mf* *cresc.* *dim.*

*p* *rit.*

*pp* *dim.*

*rit.*



#### 4-3. ドホナーニの民謡の取り入れ方の特徴

本章において楽曲に取り入れられた民謡と実際の楽曲について比較し検討を行ってきたが、ドホナーニの民謡の取り入れ方に明確な傾向が見られた。民謡を原曲に近い形のまま取り入れるという傾向が見られ、例えば民謡からインスピレーションを受けて新しいものを生み出すというような新たな創作はしていない。すなわち、民謡の旋律を純粹に素材として楽曲に活かすということが、ドホナーニの民謡に対する姿勢であると言えるであろう。

#### 5. 1920年前後のハンガリーとドホナーニ

「3. ドホナーニについて」でも触れたが、ドホナーニの作風はドイツロマン派とハンガリーらしさの折衷であるとされている。また、ドホナーニは民俗音楽研究をしていない。よってハンガリーの民俗音楽を追求したバルトークやコダーイとは異なる立ち位置にいる作曲家であると言える。

ドホナーニは前述した2人に比べて、民謡を用いた楽曲数は少ない。しかし、本研究を進める中で、それらの楽曲を作曲した時期に明確な偏りが見られることが判明し、1920年前後に集中していることが認められた。同時に、楽曲名に「ハンガリー」という言葉が多く用いられていることもこの時期の楽曲の特徴であることも判明した。そこで、1920年前後に作曲されたドホナーニのすべての楽曲をまとめることとした。以下の表において、括弧書きで曲名を示した楽曲は他者の作品をピアノ独奏用に編曲したものを示し、編成が書かれていない楽曲についてはピアノ独奏となっている。また、ハンガリーの民謡を活かしていると考えられる楽曲ならびに「ハンガリー」という明確な言葉が曲名につけられているものを太字で表している。

作曲年	曲名・編成
1917	ハンガリー民謡による変奏曲 Op.29 <sup>4</sup>
1920	パストラレー (ハンガリーのクリスマスの歌〈天上より天使が降りてくる〉による)
1920	(高貴なワルツ)
1920	(ジプシー風ロンド)
1920	国民の祈り—ハンガリーの信条 [様々な種類の編成]
1921	ハンガリーの将来 [混声合唱 (ピアノ伴奏)]
1922	イヴァの塔 Op.30 <sup>5</sup> [歌劇]
1922	ハンガリーの未来 [混声合唱]
1922	ハンガリー民謡 [歌とピアノ]
1923	祝祭序曲 Op.31 <sup>6</sup> [管弦楽]
1924	ハンガリー牧歌 Op.32a <sup>7</sup>

## 6. 音楽と政治

前章において、1920 年前後にドホナーニの作曲した楽曲に偏りが見られ、その多くが民謡を用いていたたり、「ハンガリー」という明確な言葉が曲名に使われていたりすることが判明した。そこで、「1920 年前後」という年代に重要な意味があり、そこには政治的事情が関係していると考察した。1920 年前後にハンガリーの政治的状況に影響を与えた出来事と言え、1914～18 年に繰り広げられた第 1 次世界大戦が挙げられるであろう。以下に、第 1 次世界大戦敗北から 1920 年の講和条約調印までのハンガリーの政治状況についてまとめる。

<sup>4</sup> ドホナーニが初めて民謡を用いた作品である。

<sup>5</sup> 作曲自体は 1915 年に開始された。この楽曲については資料が入手できなかったため、詳細を確認できていない。

<sup>6</sup> ブダペスト市成立 50 周年記念音楽祭委嘱作品として作曲された。この音楽祭では、ドホナーニの《祝典序曲 Op.31》のほか、バルトークの《舞踏組曲 Sz.77》、コダーイの《ハンガリー詩篇》が演奏された。

<sup>7</sup> ドホナーニは作曲した年に、管弦楽、ヴァイオリンとピアノ、チェロとピアノのそれぞれの編成のために編曲をしている。

## 第1次世界大戦敗北後のハンガリーの政治状況（伊東 1997: 77-78）

1918年秋

オーストリア＝ハンガリー二重帝国の敗北が明らかに。同年10月に第1次独立革命によりブルジョア民主主義政府<sup>8</sup>成立。

1919年3月

革命統治評議会によるハンガリー・タナーチ（ハンガリー語でソヴィエトの意）共和国政府<sup>9</sup>成立（第2次革命）。

1919年8月

フランスなどの外圧やルーマニア軍の進撃、国内反革命運動などにより統治評議会辞任。社会民主党による労働組合政府に権力委譲も、反革命勢力によってわずか4日で打倒される。しかしこの反革命勢力も政治的権力を樹立できず、結果として国内最強勢力は反革命国民軍部隊となる。

1920年3月

露骨な軍事的監視、スパイ活動のもとで行われた国民選挙により、ハンガリーは王国に復帰。1944年まで権威主義的独裁体制が続く。

1920年6月

講和条約（トリアノン条約）調印。ハンガリーの領土は戦前の約3分の1に、人口は約5分の2になった。

わずか数年の間に何度も政府が変わり、権力も革命側、反革命側、軍部というように激しく移り変わっていたことから、この時期のハンガリーは政治的に大きな混乱の下にあったことがわかるであろう。このような非常に不安定な情勢下で、ハンガリーの芸術

---

<sup>8</sup> 独立と48年党、ブルジョア急進党、社会民主党の連合による。

<sup>9</sup> 社会民主党と共産党による。

家たちは革命側に参加をしており、ドホナーニ、バルトーク、コダーイも例外ではなく、彼らは音楽監理委員会に籍を置いていた。しかし 1919 年夏の反革命勢力の台頭による結果、革命勢力は国外に逃亡するか、身を隠さねばならない立場となってしまった。すなわち、革命勢力において政府の要職にあったドホナーニらは政治的に困難な立場になってしまったのである（伊東 1997: 79-82）。

このように、前述した 1917～24 年にドホナーニによって作曲された楽曲は、政治的過渡期に作曲されたものであるということがわかる。政治的状况により置かれている状況が変わっていることを考えると、ドホナーニの音楽も政治的な影響を大きく受けていると考えることができるであろう。

それを裏付けるものとして、ドホナーニのインタビューの存在が挙げられる。彼は「様々な活動の中で、自身を作曲家であると考えている」（Szánthó 1942）、「心境を音楽で表現する習慣がある」（Dohnányi 2002）と答えていることから、彼の音楽は常に彼の心境に直結する、すなわち音楽と彼の置かれている状況が連動しているということができる。また、「その時に作曲している曲が、自分が最も好きな曲である」（Szánthó 1942）ということからは、1 曲 1 曲に思い入れがあり、こだわりなく作った曲はないと考えて良いであろう。これらの 3 つの発言を考慮すると、当時の彼の心境に最も大きな影響を与えたであろう政治的状况と、この時期に作られた楽曲には関連性があると考えられる。

## 7. まとめ

本稿では、ドホナーニがどのように民謡を取り入れたのか、またそれによってどのようなことを表現しようとしたのか考察を行い、ドホナーニの民謡に対する姿勢を考察してきた。

今回取り扱った《パストラール》と《ハンガリー牧歌 Op.32a 第 1、5 番》から、ドホナーニにとって民謡は素材であり、民謡の旋律をそのまま活かして作曲を行う傾向にあったということが判明した。民謡のインスピレーションから新たな創作を行うことはせず、純粋に旋律を素材として活かしながら、自身の音楽を作っていたのである。

視点を変えてドホナーニの民謡を用いた楽曲全体について検討を行うと、それらの作曲時期は第 1 世界大戦後の 1920 年前後に極端に偏っていることが判明した。他の時期にはこのような偏りは見られない上に、ドホナーニが民謡を多用する作曲家ではないことを考えると非常に珍しいことであり、偶然起きたことであるとは考えにくい。また、

1920 年前後に作曲された曲には、「ハンガリー」という言葉が曲名につけられているものが多いという、もう 1 つの特徴も見られた。

ドホナーニの楽曲への民謡の取り入れ方や民謡を活かした楽曲を作曲した時期、またインタビューならびに 1920 年前後のハンガリーの政治的状況を考慮すると、ドホナーニは民謡を用いた楽曲を集中的に作曲することにより、ハンガリーのナショナリズムやアイデンティティを音楽で表現しようとしたと考えられる。同時期の曲名に「ハンガリー」という言葉が多用されていることも、同様の理由であろう。

民謡に大きな関心を抱いたバルトークとコダーイに対し、民謡に関する研究をしなかったドホナーニであるが、この考察によりナショナリズムという点で両者と一致していたことが判明した。また、ドホナーニが民謡を用いて作曲する際には、民俗音楽研究家であり友人でもあった彼らの成果を取り入れていたことから、3 者の結びつきを感じることができる。

今回は、『ハンガリー民謡大観』と『ハンガリーの民俗音楽』のみを用いて考察を行ったため、実際に用いられた民謡を見つけることができたのは一部であった。今回見つけられなかった旋律についての考察は、今後の課題としたい。

#### 〈参考文献〉

バーリント, シャーロシ (Bálint, Sárosi)

1994 『ハンガリーの音楽：その伝統と語法』 横井雅子 訳 (東京：音楽之友社) [*Zenei anyanyelvünk*, (Budapest: Gondolat, 1975)]

Bartók, Béla Kodály, Zoltán

*A Magyar népzene tára.* (Budapest: Akadémiai Kiadó)

1951 1. *Gyermekjátékok.* Kerényi György ed.

1953 2. *Jeles napok.* Kerényi György ed.

1955-56 3A-B. *Lakodalom.* Kiss Lajos ed.

1959 4. *Párosítók.* Kerényi György ed.

1966 5. *Síratók.* Kiss Lajos and Rajeczky Benjamin ed.

1973 6. *Népdaltípusok.* Járdányi Pál and Olsvai Imre ed.

Dohnányi, Ernst von

1926 "Hungary's Undying Love for Music" *The Etude* 44/4, 253-54

Dohnányi, Ilona von

2002 *Ernst von Dohnányi: A Song of Life.* James A. Grymes ed. (Bloomington: Indiana University Press)

Grymes, James A

2001 *Ernst von Dohnányi: A Bio Bibliography.* (Westport, Connecticut: Greenwood Press)

2005 *Perspectives on Ernst von Dohnányi.* (Lanham: Scarecrow Press)

- 伊東信宏  
1997 『バルトークー民謡を「発見」した辺境の作曲家』（東京：中央公論社）
- 間宮芳生  
1995 『バルトーク・ベーラ ハンガリー民謡』 歌詞対訳 伊東信弘（東京全音楽譜出版社）
- 鈴木啓資  
2019 「コンポーザー・ピアニストに見られる時差－Ernő Dohnányi 最晩年の演奏」『2018年度東京音楽大学大学院博士後期課程博士共同研究 B 報告書』（東京：東京音楽大学） 42-54.
- Szánthó, Dénes  
1942 “Beszélgetés Dohnányi Ernővel," *Magyar nemzet* (8 March 1942). Translated by Lajos and Judith Koncz
- 横井雅子  
2006 『ハンガリー音楽の魅力ーリスト・バルトーク・コダーイー』（東京：東洋書店）
- 〈楽譜〉
- Dohnányi, Ernő  
1922 *Pastorale „Mennyből az angyal”* (Budapest: Rózsavölgyi&Co.)  
1925 *Ruralia Hungarica Op.32a* (Budapest: Rózsavölgyi&Co.)